

令和2年産 大麦栽培こよみ 高品質で、売れる大麦づくりをめざして！

令和元年9月
 ●射水市 ●JA いみず野
 ●射水市農業技術者協議会
 ●高岡農林振興センター

【収量構成の目安と品質目標】

収量	400kg/10a
穂数	450本/m ²
一穂粒数	30粒
2.3mm以上	85%
千粒重	35g
硝子率	40%以下

■目標苗立数と播種量の目安

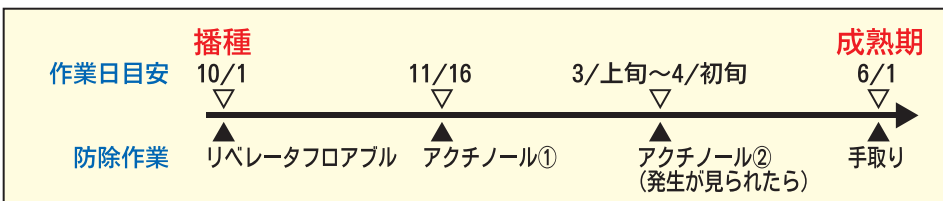
播種時期	目標苗立数 (本/m ²)	播種量の目安 (10a当たり) ドリル播
9月26日～	140	6.0kg
10月上旬	150	6.5kg
10月中旬	200	8.5kg

※ドリル播の播種深度は3cm程度とする。
 ※10月上旬まで播き終えましょう。

■施肥の目安 (ドリル播、10a当たり)

施用時期	資材名・施用量
耕起前	土カパワー 100～150kg
播種時	LP大麦48号 40～45kg

【カラスノエンドウ防除の作業体系例】



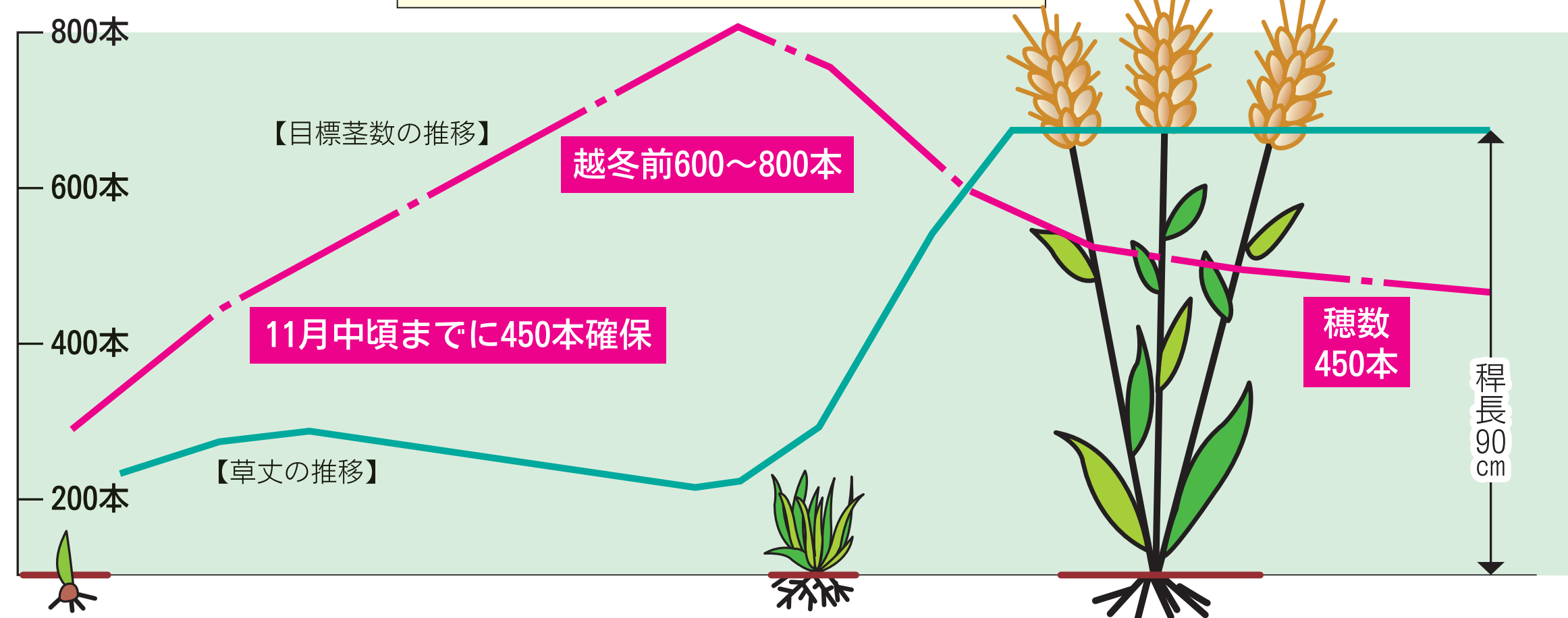
■除草剤

散布時期	対象雑草	薬剤名	10a当たり
播種後～麦3葉期 (雑草発生前～発生始期)	1年生広葉雑草 スズメノテッポウ カラスノエンドウ、カスノコグサ	ハーモニー細粒剤F	4～5kg
播種後～麦3葉期 (雑草発生前～イネ科雑草1葉期まで)	1年生雑草 カラスノエンドウ カスノコグサ	リベレーターフロアブル	60～80mℓ (水100ℓに希釈)
穂ばらみ期まで (雑草生育初期)	1年生広葉雑草 カラスノエンドウ	アクチノール乳剤	200mℓ (水100ℓに希釈)

除草剤の効果を高めるため、砕土率を高めましょう。

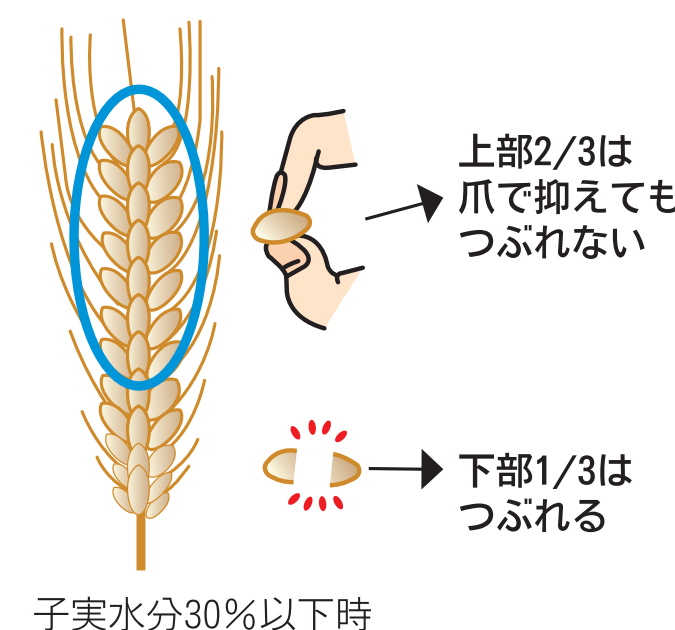
初期生育確保のためのポイント

1. 排水対策を徹底し、砕土率を高め、苗立率を向上させる。
2. 播種時期に応じた適正播種量を厳守し、目標苗立数を確保する。
3. 基準基肥量を守る。



【刈取りの目安】

出穂後45日頃
 子実水分23%から



栽培管理のポイント

8月下旬～9月上旬	9月中旬～下旬	10月上旬～	11～12月	積雪期間	3月	4月	5月	6月
播種前の排水対策は確実に	耕起は丁寧に	適正播種量で苗立ち確保	防除の徹底	適期刈取りで高品質麦に	雑草管理	(次年度産大麦)排水対策		
<p>排水対策の徹底</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 土破砕(サブソイラ)などの排水対策を実施する。 ● 稲刈後直ちに額縁排水溝や基幹排水溝の設置、心消毒済種子の使用 (農協購入種子は消毒済み) ● 消毒済種子を使用し、病害の発生を防止する。 ● 土壌pH6以上を目標に耕起前に土カパワーを100～150kg/10a施用する。 ● 土壌pHの矯正 	<p>施肥・耕起・砕土・作溝・播種</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 雑草の多いほ場は、除草剤を散布する。 ● サイドリッジを付け排水に努める。 ● 考慮し、適正量とする。 ● 基肥量や播種量は、播種時期、播種方法を向上を図る。(目標 砕土率60%以上) ● 耕起作業は土が乾いた状態で、砕土率の一連の作業は1日で終了する。 	<p>【溝掘後のほ場】</p> <p>ただし、額縁排水溝は水尻口より高く</p>	<p>排水溝の手直し</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 点検を行い、ほ場にたまった水を早期に排出する。 ● 排水溝は随時手直し。 	<p>赤カビ病の防除 (遅れると防除効果が低下)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 1回目：穂揃い期(開花始め) ● 2回目：1回目散布から1週間後 ● トップジンM水和剤1000倍 150ℓ/10a ● トップジンM粉剤DL 4kg/10a 又は、 ● シルバキュアフロアブル2000倍液 150ℓ/10a ● ワークアップ粉剤DL 3kg/10a 又は 	<p>刈取り調整</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 清掃を徹底する。 ● 異種穀粒の混入を防止するためにコンバインの 	<p>除去する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 子実水分23%から ● 出穂後45日頃 ● 刈取りの目安は子実に爪跡が残らなくなった頃。 	<p>雑草管理</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 固め、稲刈り後の土壌が速やかに乾くよう努める。 ● コシヒカリ跡に作付する場合、中干しで田面を ● 早生跡の作付とする。 	<p>るので、大豆や園芸作物・緑肥等の作付に努める。</p> <p>収穫後のほ場を放置するとカメムシの発生源となる。</p>

大麦跡を有効活用し、大豆・園芸作物作付による収益確保、緑肥作付による土づくりを行いましょう。